

ミュンヘンの文学散歩(9)

München ——— Reiseführer für japanische
Literaturfreunde (9)

佐野晴夫

68. イーザル河

前号でひとまずシュワービング地区の文学散歩を終えたので、今度は、先ずイーザル河左岸を、次いで右岸を散策してみよう。学都また芸術都としてのミュンヘン自体がイーザル河畔のアテネとか、フィレンツェとか呼称される様に、聖母教会の玉葱形の2つの塔とともに、南独の大都市はこの美しい河を抜きにしては考えられない。1923年9月23日に、イーザル河上流の渓谷を訪れた斎藤茂吉は「ミュンヘン雑歌」と題して短歌7首詠んでいる。

はるかなる國とおもふに峽間には木精おこしてゐる童子あり
イサールの谿のこだまは谿かげに七のこだまとなりて消えたる
ひるすぎのおもき空気にふるひくる遠雷は川のみなかみ
イサールの谷の柳の皮むきて箸をぞつくる飯ひを食ふがに
山かわのみづに下り来て現身を恐るるがごとく足を洗へり
支那國の人ひとりみて山がはの流れ見おろすは何か寂しき
かすかなる心なごみて川上のしろき砂地に靴ぬぎにけり⁽⁵⁷⁾

ドナウ河の支流であるイーザル河は北ティロルのインスブルック北方に発して、バイエルン高原を貫流し、ランツフトやフライジングをかすめてパッサウでドナウ河に合流するまで約280 kmもある。斎藤茂吉はミュンヘン郊外東南部に位置する上流のイーザル渓谷（現在プルラッハ）辺りへ遠出したときに詠んだものと推測される。

グロスヘッスセロエル鉄橋からプリンツ・ルートヴィッヒ台地を下り、ミュンヘン市街へ入ると、砂州のフロスレンデを間に夾んだマリーエンカウゼン小橋、右手に動物園を眺めながらタールキルヒナー橋、自動車や市街電車の往来するブルーダーミュール大橋、ブラウナウアー鉄橋をくぐり抜けると、もう旧都心に近い。王家の名に因んだヴィッテルスバッハ橋は、我々の文学散歩第1回に言及した旧南墓地にほど近い。さらにルートヴィッヒ大橋の手前にかかるライヘンバッハ橋またコルネリウス橋・ツェンネック橋は世に名高い「ド

イツ博物館」へ通じている。中州に造成されたこの博物館周辺は、大阪の中之島地域を小規模にした趣きがあり、博物館島を挟んでマリアン橋、プラター橋、そしてマキシミリアン大橋へとつづく。さらにルイトポルト大橋、マックス＝ヨーゼフ大橋、ジョン＝エフ＝ケネディ大橋を経ると、もはや郊外の観がある。イーザルヴェール＝オーバーフェーリング小橋あたりからミットレーラーイーザル運河とに挟まれた中州をこえて、イギリス庭園を横断して来るハインリッヒ伯橋、ライントラー鉄橋以北には田園風景があるだけだ。

69. ドイツ博物館(Deutsches Museum, M22. Museumsinsel 1, Tel. 21791)

通常、都心から博物館へは、市街電車18番を利用してルートヴィッヒ橋で下車すれば目の前に位置する。1903年にO.v.ミラー個人の発起によって「理工学の傑作」を収集する事業が始められることになり、1906年にかけてのいわゆるコーレンインゼル(石炭島)に礎石が置かれた。1905年のコンペで入賞したG.v.ザイドル(1848-1913)の設計プランで1908年から建設が開始されたが、設計者の死後は弟E.v.ザイドルとO.ビーバーの協力で押し進められ、ついに1925年に「工学の偉業を顕彰するドイツ博物館」が開館された。理工系の分野にさほど関心のない人であっても、戸外に設置された実物の飛行機から地下の炭坑発掘の人形像を眺め、フーコーの原理を1階から最上階まで吹き抜けで地球の自転を容易に確認さす簡単な装置まで観察するとき、これが個人の手によって実現した事実には驚嘆し、ドイツ人の収集力の徹底性と完璧さに驚嘆するであろう。

なお、この博物館の2,400席の会議場(コングレスザール)では、様々な国際会議ばかりではなく、頻繁に音楽会が開催されている。しかし、国民劇場やゲルトナー広場のオペラ座などに較べて、このホールでの音質は、ミュンヘン音楽大学の講堂に次いで良くない。2階ならばともかく、平土間(Parkett)の聴衆は、井戸の底でコンサートを聴く心地がする。どうして別の会場を使用しないのか、とミュンヘン児に尋ねてみても、「会場の雰囲気だ」と言うだけで、音質にこだわる日本人を納得させてくれなかった。だが、後日、ウィーンの楽友会ホールを訪れて、ようやく、ここをドイツ博物館のホールが模倣したことに気付き、初めて「会場の雰囲気だ」と言って、それ以上の説明を避けた理由に合点がいった。

自然科学の博物館を訪問したならば、ついでに、イーザル河をはさんで、都心側を覗いてみよう。そこに面白い屋根をもつ建物がある。ヨーロッパ特許庁である。

70. ヨーロッパ特許庁(Zweibruckenstraße 12.)

近年、ヨーロッパ特許庁へと名称を変更したが、それまでは地方分権のひとつの象徴でもあるドイツ特許庁(Deutsches Patentamt)であった。これは、1877年に設立されたが、1950年にミュンヘン市へ移転された。ここにかけて重騎兵の荒廃した兵舎跡があったが、その2棟を利用し、1954年から4年間かけて建てられた。そして最上階には、その建物の性格を表す象徴的なものがおかれ、それが人目をひく。それは「マグデブルクの半球体」と呼ばれている1654年のオットー・ゲーリックの真空実験を偲ばす2つの金メッキされた半球体である。

ここから、さらにイーザル河の左岸の文学散歩をつづけることにしよう。

71. ルートヴィヒ・ガングホーファーの旧居(Steinsdorfstr. 10.)

ドイツ特許庁の南側のイーザル河畔にはしる街路がシュタインドルファー街であり、この10番に劇評家かつ小説家であったガングホーファー(1855 - 1920)が住んでいた。

彼はバイエルン国の著名な内閣顧問官を父親にもち、カウフボイレンに生まれ、ミュンヘン、ベルリンで学び、ライプツヒで哲学の学位をとった。1881年にヴィーンで劇評家となり、次いで新聞社の主筆となった。1880年には、すでにゲルトナー広場の劇場で『アンマーガウのゴットシュニツァー氏』を初演したこともあり、また狩猟家としても、アルピニストとしてもこの都市が好都合なためか、1894年から1919年にかけて、主としてミュンヘンのこの街区の「庇の大きな家」に住み着いた。そして1897年には、彼がE.v.ヴォルツォーゲンと一緒に『文学界』を発刊すると、ミュンヘンの著名な多数の詩人、演劇人、出版人が参画した。また彼は長編小説『マルティーンの僧室』(1894)2巻、『高貴なる反照』(1904)2巻、『塩まみれの男』(1905)等を発表した。

72. フリードリッヒ・ヴィルヘルム・シェリングの銅像 (An der Südseite in den Parkanlagen auf der Maximilianstraße)

デュタインドルフ街を北上して出会う大通りが、マキシミリアン街になる。そのマキシミリアン橋近くの公園施設に1856年から68年にかけて設置された4体のブロンズ像がある。北側に将軍デロイ伯とルムフォルト、南側にヨーゼフ・フランフォファーとフリードリッヒ・ヴィルヘルム・シェリング(1775-1854)の立像がある。ミュンヘン児は19世紀初頭にシェリングがヨーゼフ・ゲーレス

とその一派と共にロマン主義をミュンヘンへ導入してドイツの文学上の中心地にしてくれたことを忘却していなかった。シェリングは1806年にはバイエルン学術アカデミーの会員として、思想的指導者となり、美術アカデミーの書記官長として活動した。また1827年から41年にかけて大学で教授した。既に触れた様に、彼の旧居は、プロメナーデ街10番にあった。

ところで、このマキシミアン通りの中央部にツームブッシュによって制作されたマックス2世の記念像が1875年に加わった。しかも赤大理石の台座上には4体の青銅像が君主の徳を、また4体の童子像に付いたワッペンがバイエルンの4つの種族（バイエルン族、シュワーベン族、フランケン族、プファルツ族）をアレゴリー的に表現したものと言われている。

73. リオン・フォイトヴァンガーの旧宅(St. - Anna - Platz 2.)

マキシミアン橋とプリンツレゲンテン街の「芸術の家」との間地点にあたる聖アンナ広場2番にある建物にリオン・フォイトヴァンガー（1884 - 1958）の記念版が掲げられている。

彼は、1908年に雑誌「シュピーゲル」を創刊したり、ソ連滞在中にも雑誌「言葉」の共同発行人になったこともあるが、もともと平和主義的・社会主義的作家である。ミュンヘンの工場主の息子として生まれ、主として地元の大学で文献学および哲学を学び、1907年に学位を取得した。彼は、その後、劇評家、文学協会「フェーブス（太陽）」の指導者、また民衆劇場の監督として活躍した。1914年にチュニスで監禁され、ドイツへ逃げ帰ったことがある。1927年にベルリンへ移ったが、1933年に彼の著書が焚書のうきめに遭ったのを契機に、まずフランスへ、さらにアメリカへ亡命して、ついにロス・アンゼルスで客死せざるをえなかった。

長編小説『醜い公爵夫人マルガレーテ・マウルタッシュ』（1923）、『ユダヤ人ズース』（1926）、『ゴヤ』（1951）や『ヨーゼフ3部作』（1932-45）といった歴史的、伝記的な素材に時事問題を絡めた小説で人気を博した作家である。また『石油の島』（1927）、『ヒルは特赦をうけるのか』（1936）といった抑留体験に基づく平和主義的、革命的な戯曲や『モスクワ』（1937）、『好意のないフランス』（1941）というルポルタージュ作品が残されている。

74. ゲオルク・ブリッティングとヨーゼフ・マグヌス・ヴェーナーの友情の家

(St.-Anna-Platz 10.)

聖アンナ広場10番の家でゲオルク・ブリッティング(1891-1964)とヨーゼフ・マグヌス・ヴェーナー(1891-1973)の両詩人は、すこぶる仲がよかった。両家族も友情で結ばれ、毎週日曜日の夜は一緒に夕食にピヤホールへ出かけた。だが、ブリッティングはすぐさま帰ろうとはしないで、帰宅がいつも深夜2時になったという。

レーゲンスブルク生まれの抒情詩人にして短編作家のゲオルク・ブリッティングは、1914年に大学在学であったが、志願兵となった。3年後重傷を負って帰還した。1920年以降、ミュンヘンに定住して、故郷に流れるドナウ河の魔的力、エロスの世界の魅惑と人間の没落へ瀕する危機といったものを描いた『河畔の小世界』(1933)、『花環で飾られた池』(1937)、『ハムレットという名の肥満男の経歴』(1932)等の作品や自然美を直截にうたったり、自然のもつ原始的な非情を直視した詩集『地上の昼』(1935)、『烏、馬そして鶏』(1939)、『葡萄酒礼讃』(1942)等を発表していたが、1950年代の初めに聖アンナ広場に転居して来た。

他方、レーンのベルムバッハの教師の息子に生まれたヨーゼフ・マグヌス・ヴェーナーは、イエーナ大学で文献学を学んだ。牧師になる当初の志望を変更し、俳優から舞台監督となった。学生時代よりバッハオーフェンやクラークスの思想に影響を受け、彼も第1次世界大戦では志願兵となり、ヴェルダン戦線で重傷を負った。この記念が彼の戦争文学である『ヴェルダンの7戦士』(1930)で、ものすごい戦闘の中から、ドイツ民族の新しい運命と秩序とが生まれ来ることを描こうとした。その後、ミュンヘンで諸作品や劇評を発表した。第2次世界大戦中の爆撃で家財を失い、郊外のトゥツィングへ疎開したが、戦後、ヴェーナーは1955年に都心の聖アンナ広場の芸術家の住まいに引っ越して来、ブリッティングは1964年に64歳で逝去したが、2階下のヴェーナーは、1971年、80歳の誕生日を多数の人から大いに祝された。

74. 芸術の家(Prinzregentenstr. 1.)

聖アンナ広場より北へ5分も歩かないうちに「摂政殿下」を意味する大街道プリンツレグテン街に出る。その10番に日本領事館(Tel.471043-45)がある。道の背後にそそり立つ建物が、バイエルン州の経済省(Nr.28.)であり、左前方を見ると、すでにヒトラーとムッソリーニとのエピソードで触れたことのある「芸術の家」[Haus der (Deutschen) Kunst]がある。1931年に焼失し

た旧植物園内のガラス宮の代わりに、1933年から4年かけて建築家パウル・ルートヴィヒ・トロースト(1878-1934)によって建てられたが、ナチス時代の記念碑的スタイルの建物である。

そして街道の向こう正面に見える建物がバイエルン国立博物館である。こちらへ行く前にルイトポルト橋のたもとへ立ち寄ってみよう。この橋には、石像が飾られている。

この橋を渡り、平和の天使像を迂回し、ヨーロッパ広場を過ぎたあたりから、ふたたび、プリンツレゲンテン街がつづく。だが、橋をこえると、すでにそこはイーザール河右岸のボーゲンハウゼン地区にあたるので、こちらは後回しにしよう。

75. バイエルン国立博物館(Prinzregentenstr. 3.)

1855年にバイエルン国王マキシミリアン2世(1811-1864)が国民に国立博物館を建造することを提案し、その建物はガブリエル・フォン・ザイドル(1848-1913)の手で1894年から1899年までの歳月をかけて完成した。ここには、美術史上また文化史上価値あるコレクションが総括的に芸術の粋を集めた形で収納されている。1階にそれらが時代別に展示され、階上には個人コレクション、時計やロボット、衣装、陶器等が、地階には民俗芸術、農民の部屋、宗教的な民俗芸術品、装飾品、例えば、木製のキリスト誕生の模型(Krippe)が人目をひく。

この建物は、英国庭園の東南部分に接している。その接線をなしている小道が「雲雀の畑」を表すレルヘンフェルト街である。

76. バイエルン方言の詩人ルートヴィヒ・トーマの長閑な仮寓 (Lerchenfeldstr. 5.)

ユーモア作家ルートヴィヒ・トーマ(1867-1921)は営林官の子弟として受難劇で有名なオーバーアンメルガウに生まれ、初め林学を志したが、途中でエルランゲン大学、ミュンヘン大学で法学を学び、ミュンヘン郊外のダッハウで弁護士となった。そのかわら、文筆活動を始め、30歳のとき、週刊誌『ジンプリッティスムス』の編集者となり、とりわけO.J.ビアバウム、O.ファルケンベルク、Th.Th.ハイネと一緒に仕事をした。彼はペター・シュレミールの筆名を使い、バイエルン人の俗物根性や官僚と僧侶の頑迷固陋ぶりに対して批判した。そのため、筆禍問題をひき起こして侮辱罪のかどで投獄をうけたことが

数回ある。その代表的なものが『アグリーコラ』(1897)『婚礼』(1901)である。また彼は、『メダル』(1901)『ローカル線』(1902)といった喜劇や『マグダレーナー』(1912)という悲劇も書き下ろしている。

だが、ユーモアに富み、風刺をきかせた巧みな語り口と温かい人間愛を秘めたこの作家のユニークさを最も反映しているのは、日本人にも比較的良く読まれている『悪童物語』(1904)やその続篇『フリーダ伯母さん』(1906)である。また驚いたことにバイエルン方言でうたった詩に『聖夜』(1906)もある。それだけに、彼はテーゲルン湖そばのロータッハ＝エーゲルンにおいて54歳で逝去したとき惜しまれ、文学的遺品はミュンヘン市立中央図書館に預けられた。

77. シュペングラーの閑居(Widenmeyerstr.)

日本人にも馴染みのある著書『ヨーロッパの没落』の著者オスヴァルト・シュペングラー(1880-1936)もイーザル河に面したヴィデンマイヤー街に居住したことがある。自室で、いつも河原の優しいせせらぎを聴きながら、また思考の合間にアルプスの静冽な山並に目を休ませながら、開花・成熟・崩壊という3段階の有機体説的な図式によって、決定論的に歴史反復の過程を規定する文化周期理論を展開したのである。

ここで、あらためて、再び、上流の「ドイツ博物館」近くまで遡り、今度は、イーザル河右岸を下流へと散策することにしよう。

78. カルル・ファーレンティーンの家(Zeppelinstr. 41.)

カルル・ファーレンティーン(本名ファーレンティーン・ルートヴィヒ・ファイ、1882-1948)は、日本人には、殆ど知られていないが、俳優にして、また左翼思想肌のトゥホルスキーを友人にもつ作家でもある。そして民衆喜劇の作家としての人気ぶりから生家の壁には記念板がはめ込まれているばかりではなく、すでに見た様に、旧都心のヴィクトリアマルクト市場には、「リースル・カルルシュタットの泉」近くに、「ファーレンティーンの家」もあり、さらに「イーザルの門」には「ファーレンティーン博物館」があるほどの人気振りだった。

『低俗音楽酒場』『ミュンヘン近郊の盗賊騎士』(1963)『堅信礼の少年』等といった小コメディで、彼は独りで、ときにはパートナーの女性リースル・カルルシュタットと共に、込み入った日常世界における人間のやりきれなさをグ

ロテスクなシーンの中に表現した。彼の時事風刺的小唄の言語的機知に特徴的なのは、彼が真剣に思考を分かり易くする手段として言語を使用することで、その後に、ナンセンスで終わらず、深遠な論理性に達したことを印象づけたことである。その意味で、彼こそナンセンス演劇の先駆者と呼べ、また若い時期のB.ブレヒトに影響を及ぼしたことも肯首できる。

79. マキシミリアネーム(Max-Planck-Strabe 1.)

この秀麗な建物は、マックス皇太子の最初の計画では、すでに1832年に、イーザル台地に偉大な国家的建造物を設けることであり、望まれていた当初の尖頭アーチ建築様式は、形式的には直線で延びてきたマキシミアン街の終点を表すものであった。だが、マックス2世自らが対立的様式である円形アーチへ変更することを命じた真意は、尖頭アーチ建築様式の「古代ドイツの形式要素がアーケード使用時には保持されていなかった」という見解によるものであった。全体的に見て、別室を多数もつこのロマンチックな建物は、とりまく周辺の自然と良く調和し、また建物からの眺望も抜群である。

80. カルル・レントゲンの最晩年の住居(Maria-Theresia-Strabe 27.)

1901年にノーベル物理学賞を授賞したヴィルヘルム・コンラート・レントゲン(1845-1923)は、1900年にはミュンヘンに転居していた。そして愛妻の死の数日前に、事情があつて隣街のプリンツレゲンテン街からこの美しく清閑なマリア・テレージア街27番へ転居して来たのである。そして彼は、逝去するまでの数年間をこの住居ですごした。

81. ルドルフ・ディーゼルの邸宅(Maria-Theresia-Strabe 27.)

同じく、自分の名前を冠したモーターの発明者で世界的に著名な技術者であるルドルフ・ディーゼル(1858-1913)も、1900年にイーザル河の崖上に2年間かけて瀟洒な邸宅を建てた。パリに生まれたこの自然科学者は、1870年にはアウグスブルクに移っていたが、彼にとって1900年はパリ博覧会で待望のグラン・プリを授賞した年でもあった。

82. アドルフ・ヒルデブラントの別荘(Maria-Theresia-Strabe 23.)

有名な彫刻家アドルフ・ヒルデブラント(1847-1921)がボーゲンハウゼン地区に芸術家別荘をつくり、1898年10月に引っ越したとき、彼は丁度50歳で名声

の頂点にあった。この館に世紀の転換期のあらゆる分野で活躍する偉人たちが——
ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、コジマ・ヴァーグナー、ハンス・プフィッ
ナー、リヒアルト・シュトラウス、ブルーノー・ヴァルター、ルートヴィッヒ・
クルチウス、イゾルデ・クルツ、摂政宮ライトポルト、ループレヒト皇太子、
ヴィルヘルム・レントゲン、ヴェルナー・フォン・ジーメンス、マックス・レー
ガー、カルル・ヴォルフスケール、リカルダ・フッフ、ハインリッヒ・ヴェル
フリンまたヘルマン・レーヴィといった人達が——出入りした。

当時、この家の主人はロダン(1840-1917)と並んで最も有名な彫刻家であっ
た。この新古典主義の巨匠が手がけたレンバツハ広場の「ヴィッテルスバツハ
の泉」の制作は1895年に終え、ひろく賞賛を得た。懸案となることと言えば、
ニンフェンブルク運河の東端に設置する予定の「フーバートゥスの泉」のこ
とであった。そして彼はしばしばフローレンツの別荘との間を往復したが、73歳
のとき、彼はミュンヘンのこの崖上の館で死んだ。

なお、次にふれるプリンツレゲンテン街のはずれとして設けられたルイポー
ルト・テラスにも協力を惜しまなかった。

83. ヴィルヘルム・コンラート・レントゲンの家庭(Prinzregentenstr. 61.)

摂政宮に因んだライトポルト橋を渡り、ヨーロッパ広場を経て、再度復活し
たプリンツレゲンテン街へ進んで行こう。この街すぐの61番の建物に、研究者
の名前に因んで名付けられた光線——自らは、それをX光線と呼んだが——の
発見者ヴィルヘルム・コンラート・レントゲンが1900年から1919年にかけて住
んでいた。ここへ転居して来た直後に、ストックホルムより、ノーベル賞物理
部門の最初の授賞者として決定したという知らせを受けた。レントゲンがミュ
ンヘンへやって来たとき、すでに彼は世界的に有名であったけれども、彼はこ
の都市が初めから好きであったわけではない。とくに妻ベルタは住むことになっ
たこの新しい都市に馴染めず、それまでのヴェルツブルクのことが懐かしく思
い出されてならなかった。レントゲン自身も役人根性まるだしの文部大臣や大
学関係者に極度の不満を抱いたりした。

プリンツレゲンテン街住民の落ち着きを見せながらも、いくぶん派手な社交
場で、レントゲンは質素な生活をおくった。第1次世界大戦中など、彼は妻に
食べ物を余るほどテーブルに出すことを禁じ、節約のため、奉公人の古典的な
食品である生麺が彼の愛好するものになったりした。贅沢は彼が忌み嫌うもの
であった。それだけに、ミュンヘンのファッションは彼を立腹させてやまなかつ

た。

彼の家では、大きなパーティが開かれることは極くまれであった。休日ともなると、ヴァイルハイムの狩猟小屋ですごさないときには、自宅で音楽演奏をするか、サイコロ遊びをしてすごした。妻が、健康上の理由から、音楽会へもはや行けないので、有名なピアニストの説明に従って、ある日、穴をあけた巻紙を使用したオルゴールと称すべきヴェルテ・ミニヨン・再生ピアノという楽器を作った。音楽は彼らには無くてならないものであった。

レントゲンは、1915年、ミュンヘンで革命を体験した。帰宅の途中で、デモ隊の中へ巻き込まれたこともあるが、彼は彼らを危険視することはなかった。それどころか、やがて顕著となって来る反ユダヤ主義の風潮を嘆いている。

妻ベルタの死の数日前、つまり、1919年10月31日に、彼はこの家を去らなければならなかった。なぜなら、この家の持ち主であるアルフォンス皇太子が自ら必要としたからである。そこで、レントゲンは先に述べたマリア・テレージア街11番へ移り、そこで最晩年の数年をすごしたのである。

84. 扇動家アドルフ・ヒトラーの館(Prinzregentenstr. 16.)

1929年、ドイツで悪名の高くなって来たアジテーターのアドルフ・ヒトラー(1889-1945)が、中央駅向こうにあたるティールシュ街41番のお粗末な家具付きの部屋からプリンツレゲンテン街16番へ引っ越して来た。そしてこの建物の快適な9室の住居に住むことになった。家主は入居者の経済状態に不安を覚え、金持ちのスポンサーとなっている人物が家賃数年分を担保に入れることで、やっと借家契約を結ぶことが出来た。

まもなくして、義父側の姪が好きな「アルフおじさん」のもとへやって来た。「ゲーリ」の愛称をもつアンゲリカ・ラウバルは歌と俳優の勉強に来たのである。彼は彼女が偉大なワグナー歌手に育つことを望んだ。だが、1931年に、この家でゲーリは自殺した。彼女が彼との間の子供を孕んだがための自殺なのか、それともそれ故に彼が彼女の死を願ったのか。ヒトラーの新しい恋人エヴァ・ブラウンの出現ゆえに自殺したのか、それとも彼女からヒトラーの気持ちがかかるのを恐れた親衛隊がこの出来事に関与したのか。なぜ自らの命を断ったのかは、今日でも未解明のままである。

1931年9月の宣伝旅行中に、ヒトラーがルドルフ・ヘスから姪の死を聞いたことは確かである。彼にはハンブルクで大規模な示威運動の予定があったけれども、彼はニュールンベルクから引き返した。極度に落胆し、すっかり疲労困

憊して自宅へ戻って来た。彼の神経は殆ど耐え難くなり、政治と論争とに終止符を打とうとさえしたという。

そしてアルフおじさんは、ゲーリにゾッコンであったので、死に場所に彼女の胸像を置き、彼女の命日になると、この家を訪れて数時間引きこもり、彼女の運命と死について瞑想したという。

この1年半後に、ヒトラーはドイツ国の宰相になることになる。すると、直ぐ、のちの国防大臣に就任するアルベルト・シュペール(1905-)がこの家を訪れ、その思い出を書き残している。「我々はプリンツレゲンテン劇場近くの数階建ての借家前に立ち止まった。ヒトラーの住まいは3階にあった。まず、私は控えの間へ招じ入れられたが、この部屋にはレヴェルの低い記念品または贈り物でいっぱいであった。家具も趣味の悪さを証明していた。副官がやって来て、ドアを開け、武骨に『どうぞ』と言った。そこで私は強力な宰相であるヒトラーの前に立った。彼の前のテーブル上には、分解されたピストルがあり、その掃除に彼は携わっていた様に見えた。⁽⁵⁸⁾」

かつての総統の家は、もはやとくに住宅用建築物では無くなっている。持ち主が自由州バイエルンへ代わり、そこにはバイエルン州中央罰金徴収所が入居している。

85. プリンツレゲンテン劇場(Prinzregentenstr. 82.)

プリンツレゲンテン劇場は、リットマンのプランに従って1899年から1901年にかけてルートヴィヒ王がもくろんだワグナー祝祭劇場のため建てられた。国立劇場が戦災をうけた後、1963年まで、ミュンヘン国立オペラ団が仮住まいをしたが、劇場は、目下、閉鎖中で、再開は未定である。

なお、劇場の西側にある緑地帯には、ハインリッヒ・ヴァデレの1913年制作のリヒアルト・ヴァグナーの記念像が置かれている。

86. シュトゥック別荘(Prinzregentenstr.60.)

現代芸術の華ユーゲント式博物館をもつフランツ・フォン・シュトゥック(1863-1928)の別邸へ立ち寄ってみよう。シュトゥックは、フランツ・レンバッハと同様に、画家で貴族へ出世した人物である。その分離派の新擬古派的形式をとるシュトゥックのシメントリーの立体的な母屋は、1897年から翌年にかけて建築されたもので、ユーゲント様式と呼ばれる1900年頃のオリジナルのフレスコ、絵画、グラフィック、ドキュメンテーションを散りばめた芸術美が堪能

出来る。その様式名称はこの都市で発行された雑誌名に因んだものである。

87. 自然主義作家コンラートの旧居(Ismaninger StraÙe 68.)

博物館前を交差する大通りイスマーニングァ街を北上するとき、その68番にミヒヤエル・ゲオルク・コンラート(1846-1927)が居住した。彼は1882年にミュンヘンに来て、この「怒れる若者」は1885年から1901年にかけて雑誌「社会」を発行し、自然主義文学運動の指導者として、実生活から取材した小説「イーザル河のささやき」(1887)等を発表し、エミール・ゾラの後継者になろうとした。1927年12月20日にミュンヘンで没したが、その遺品はミュンヘン国立図書館に保存されている。

88. ハインリッヒ・ハイネの思い出の地(MöhlstraÙe 41.)

ハインリッヒ・ハイネ(1797-1856)の著書「ミュンヘンからジェーナへの旅行」(1928)は、ボーゲンハウゼン地区にあるホムペシュ別荘のテラスで始まっている。これを記念してメル街41番の東屋に記念額が掲げられている。事実、彼は下宿のラートシュピーラーハウスから馬車に乗り、ボーゲンハウゼンの、現在のモンテゲラスガルテンへ出かけるのが好きだった。ここで飲むビールは、冬季でも、ことのほか美味で、自分の血液が薄まる様な心地がしたという。⁽⁵⁹⁾

余談ながら、既にヒトラーとムッソリーニとの会談にまつわるエピソードで言及したことのあるプリンツ・カルル宮殿にある財務省庭園の一角には、「ハインリッヒ・ハイネの泉」があることをつけ加えておきたい。

89. 日本食レストラン「三船」(Ismaninger StraÙe 136.)

ミュンヘン革命事件にその名称が由来するミュンヒナー・フライハイト(ミュンヘンの自由)のバス・センターから54番のバスに乗車して、ヘアーコマー広場で下車し、南側のイスマーニングァ街を百メートルを歩かない左手に三位一体教会が見える。その先右手へ曲がると、136番にレストランがある。

また同じい建物内に日本からのおみやげ物を販売し、さらに日本レストランを経営している「三船」がある。ドイツ国内ばかりではなく、ヨーロッパ中で最も日本国内で食べる食事に近いメニューと料理を提供していた。店名は、先年亡くなった映画俳優の三船敏郎が資本を提供し、彼の長男が直接経営に参加したことに由来する。しかし、三船一族が経営権を手放したあとでも、邦人に

親しまれた店名はそのまま使用されて来ている。⁽⁶⁰⁾

90. アネッテ・コルプの家(Handelsstraße 1.)

ボーゲンハウゼン地区のこのヘンデルス街1番に、1933年にフランス経由でニューヨークに亡命した女流作家アネッテ・コルプ(1875-1967)が再び帰国してごくひっそりと生活した家がある。

この家で彼女は古いアルバム帖をめくったり、自分の授賞した表彰状や勲章を眺めたりするのが好きだった。そして時の経つまま、新聞を読み、読者に手紙の返事を書いて過ごしていた。部屋には、沢山の絵画や肖像が飾られていた。それらは両親、可愛い妹、多数の友人や知人の作品であった。

ミュンヘン生まれの父親はバイエルン王室御苑の管理長であったが、母親はコジマ・ヴァグナーと親交をもつフランス人のピアニストであったことから、彼女自身の弾くピアノ演奏の腕前も来客から賞賛を受けた。また高齢に達してからも、旅行好きで、とりわけパリ行きがいつも大好きだった。また彼女と親友でもあるトーマス・マンの妻カーチャ・マンは、『書かれざる回想記』の中で、アネッテ・コルプは標準語が好きでなく、フランス語か、バイエルン方言を喋っていたと語っている。⁽⁶¹⁾ エーリッヒ・ケストナーも彼女が心底プロイセン嫌いで、彼はドレスデン生まれであるが、プロイセン人のレッテルをはられない様に苦労した。彼女が103歳だと確信したが、彼女は必死に自分の年齢を秘したと、カチャ・マンは語り、併せて彼女はいつもユニークで面白かったと述べている。

アネッテ・コルプの著作には、英国の貴族社会の狂態を描写した『見せしめ』(1913)、伝記の『モーツァルト』(1938)『フランツ・シューベルト』(1941)といった小説のほか、随筆や翻訳の仕事もある。

91. アネッテ・コルプの墓(Bogenhauser Friedhof, bei St. Georg, Bogenhauser Kirch-platz 1.)

ボーゲンハウゼン地区の聖ゲオルク教会は後期ゴシック期にありながらも、ロマネスク式の風情をもつ教会であるが、隣接する墓地は、アルトバイエルンの部落墓地の性格を残し、また無数の鍛鉄製の十字架を保存している所として知られている。

ここに、イスラエルへ行った年、つまり、1967年12月3日に逝去したアネッテ・コルプが永眠している。彼女以外にリーゼル・カルルシュタット、ヨーハ

ン・フォン・ラumont、ハンス・クナッペンブッシュ、ヴィルヘルム・ハウゼンシュタイン、グスツル・ヴァルダウ等著名人の墳墓もある。

91. ブルーノ・フランクの旧居(Mauerkircher StraÙe 43.)

シュトゥットガルト生まれのブルーノ・フランク(1887-1945)は、友人であると共に隣人でもあるトーマス・マンと同じように、市民的個人主義の思想からナチズムを拒絶してアメリカへ亡命した作家のひとりである。歴史小説『トレンク』(1926)、『セルヴァンテス』(1934)や抒情詩『事物の陰影』(1912)、戯曲『コップの中の嵐』(1930)もある。ドイツの敗戦直後にカリフォルニアで客死した。

92. トーマス・マンの旧居(Mauerkircher StraÙe 13.)

ブルーノ・フランクの言葉からマンが同時期に同じ住宅街に居住したことが分かる。

トーマス・マン一家は子供の数が増えて手狭となり、フランツ・ヨーゼフ街から転居を迫られた。「そこで、私達は、当時、イーザル河畔のすこぶるいかす街区のヘルツークパークにる2世帯用住宅を借りました。しかもマウエルキルヒアー街のこの家にはすっかり余裕がありました。⁽⁶²⁾」

93. トーマス・マンのミュンヘン滞在時代最後の自宅(Thomas-Mann-Allee 10.)

トーマス・マン(1875-1955)は1912年11月27日に建築技師ルートヴィヒを伴い、新しい自宅を求め、ボーゲンハウゼンの建築予定地を確認するため出かけている。そして1913年2月25日に正式にポシンガー街1番(現在のトーマス・マン並木通り10番)の土地をカーチャ・マンの名義で購入し、建築後の1914年1月5日頃に新居に入居した。そして1933年まで彼等はに住んだ。この別荘風の自宅を建設するために、詩人の精力はすっかりしぼり取られた思いをした。事実、この自宅で、『主人と犬』『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』『魔の山』『ヨーゼフとその兄弟たち』の主要な仕事が行われた。この家で、彼は1929年11月12日にノーベル文学賞の授賞の知らせを受け取り、またヒトラーが権力を奪取した後、ここから亡命の旅へ出ることになった。

『主人と犬』の中で、トーマス・マンは第1次世界大戦中の日常生活を描いている。愛犬バウシャウを連れて、4キロメートル上流のイーザル草地へ遠出し、犬と話をしたり、遊んだりするのが好きだった。また午前中に執筆をすま

せ、午後は庭の壁の隅に置いた椅子に、あるいは芝生上で好きな樹木に背を寄りかからせて読書するのが習慣だった。

カーチャ・マンは大きな家で、子供部屋は、父親の仕事を妨げない様に、4階にあり、賑やかな王国をなしていたと回想している。トーマス・マンの弟ヴィクトルは『私達5人きょうだい』で、家の中を描写している。「裏口から家へ入ると、煉瓦で造った暖炉のある控えの間や美しい階段へたどり着く。主要部分の3階へ、ここから背の高い両開き戸が通じている。つまり、葉巻タバコのための冷蔵庫が壁にはめ込まれていた食堂へ。さらに書斎とカーチャの部屋へ。台所と召使い部屋は地下室におろされて、また私が大変気に入ったのは、食事が昇降機によって下の方からテーブルへ載せさせるということだ。上の2層には寝室と子供部屋があった。⁽⁶³⁾」

この家には、ヘッセ、ホフマンスタール、ハウプトマン、ヨーゼフ・ポンテン、ブルーノ・フランク、エルンスト・ベルトラム、ジード、ヴェーデキント、グスターフ・マーラー、フルトヴェングラーといった偉大な芸術家や学者が訪れ来た。なかには、バイエルン王室の音楽総監督とミュンヘン宮廷オペラの指揮者とを兼任するブルーノ・ヴァルター(1876-1962)が、2頭だての青い儀装馬車で、詩人夫妻を音楽会へ招くため、門前まで出迎えに行くということがしばしばあった。しかし、時には、歓迎せざる来客もあった。その第1は、1919年のミュンヘンのレーテ革命で、赤軍派は、彼の自宅へ殺到し、悩ました。けれども、マンを尊敬していたエルンスト・トラーだけは、この暴挙を戒めた。1932年ともなると、悪しき来客以上にマン一家を苦しめたのは、ナチス党員で一族の行動を監視するために入り込んできた運転手の目を盗んで如何に無事全員がスイスへ脱出出来るかということであった。

1932年12月の終わり、彼はヴァーグナー没後50周年記念の講演を外国および国内各地の大学等ですることになっていたもので、自宅を離れ、再び戻ることはなかった。彼らの子供のエーリカとクラウスは、翌春、夜霧を利用して家に入った。その後、エーリカは若い俳優たちと市内ボンボニエールに文学キャバレー「胡椒ひき」を開いていたが、その過激な政治風刺故に封鎖され、身の危険も迫ったことから、アローザに滞在する両親にどんな事があっても、もはやドイツへ帰国してはならないと警告した。肉親ばかりではなく、幾多の友人もドイツから離れていることを勧めた。

未完

1998.4.20

注

- (57) Vgl. 『斎藤茂吉全集』 昭28. 3、岩波書店 S.117f.
- (58) Albert Speer : Erinnerungen. 1969, Frankfurt am Main.
- (59) Vgl. Heinrich Heine: Reise von München nach Genua. In : Säkularausgabe · Band 6. Hrsg. v. den Nationalen Forschungs - und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. 1986, Berlin. S.18.
- (60) Vgl. 藤原佑好「孫悟空になれなかった男——三船敏郎物語——」
〔所載 『小説宝石』(1998.2、光文社)〕 S.128.
- (61) Katia Mann: Meine ungeschriebenen Memoiren. 1973, Hamburg. S.125.
- (62) Ibid., S.30.
- (63) Viktor Mann: Wir waren fünf. Bildnis der Familie Mann. 1976 ; 41979,
Frankfurt am Main. S.248.